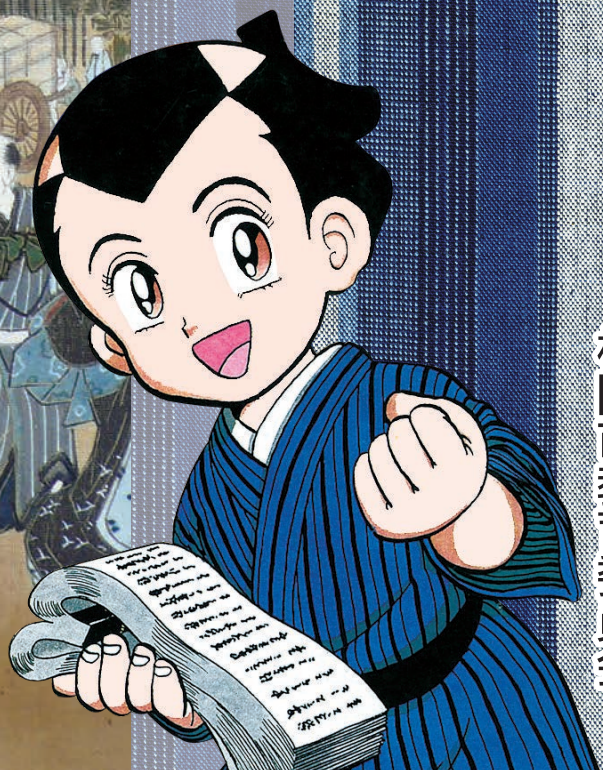
三井高利

みついたかとし

郷土の偉人を知る 4





松阪市教育委員会

はじめに

わたしたちの松阪市からは、
たくさんの偉人が生まれています。
松阪市の発展につくし、
人々のために努力をおしまなかった
偉人の生き方から、
多くのことを学んでいきましょう。
偉人の学習を進めることで、
ふるさと松阪を愛する心を大切にしましょう。
そして、松阪が生んだ偉人のように、
ゆめや希望を持って、
未来へ羽ばたく人になってください。

目次

一、「元祖」三井高利……1
二、高利と母殊法の教え……9
三、豪商のまち　松阪を歩く……13
高利さん年表……19
高利さんなんでも質問箱……20
三井家ゆかりの地……22
歴史あるまち松阪……23
松阪実業大勉強家案内双六……24

※年れいのあらわし方について

この冊子では、年れいは数え年であらわしています。数え年とは、生まれた年を一才として、新年が来るたびに一才ずつ加えて年れいを数えたものです。

一、「※元祖」三井高利

一五八八年、※蒲生氏郷は四五百森に城を築き、城下町を※「松坂」と名付けました。そして、商業を盛んにするための取り組みをおこない、商人の町の基礎を築きました。この※恩恵をうけて、江戸や京都、大坂に店を持ち、日本の人々の暮らしを大きく変える商売をおこなった三井高利が生まれました。さて、三井高利とは、いったいどのような人だったのでしょうか。



「名所江戸百景　するかてふ（駿河町）」
（国立国会図書館所蔵）

1　江戸に広まる三井※越後屋

上の※浮世絵は、江戸時代の浮世絵師※歌川広重の描いた「名所江戸百景　するかてふ（※駿河町）」です。当時も、富士山は人々

元祖
物事を最初に始めた人。一族の最初の人。

蒲生氏郷
近江国（滋賀県）日野に生まれた戦国武将。

松坂
昔の城下町の限られた地域を表すが、以後、この冊子では「松阪」に統一する。

恩恵
恵み。氏郷の商業を盛んにする取り組み。

越後屋
高利の祖父高安が越後守を名乗ったことから、高利の親の代からこの屋号を使った。

浮世絵
江戸時代にできた絵画の一つ。庶民にとても人気があった。

歌川広重
江戸時代末期の浮世絵師。

駿河町
今の東京都中央区日本橋室町。

に日本を代表する山として知られていました。広重は、その富士山を背景に、もっともにぎわいを見せた駿河町を描いたのです。この駿河町は、三井高利が江戸に初めて開いた※本町一丁目の店を移転し、※大きな店を構えた所です。※のれん印で分かるように、道を挟んで両側に三井の店が軒を並べていました。店の前の道には多くの人たちが行き来し、とてもにぎわっている様子が分かります。

三井の巨大な店が向かい合う風景は、「※呉服屋の　※切通しから　富士が見え」「呉服店　二つに切って　人通り」「越後屋が　見えそなものと　富士でいひ（言い）」というような※川柳も詠まれるくらいよく知られたものでした。

このように、「三井越後屋」の大人気と繁盛ぶりは、江戸の人々の注目を集めるものでした。



越後屋で使用していた印かん
（三井文庫所蔵）



以前は本町一丁目に店がありました

越後屋八郎右衛門（えちごやはちろうえもん）

現在は駿河町に店があります

上の印かんに彫られている内容

本町一丁目
今の東京都中央区日本橋本石町。

大きな店
移転後、道路に接した店の横幅（間口）は、呉服店四間、隣に両替店三間、二つの店で十二メートルほどだったが、少しずつ広くしていった。

のれん印
店の前にたらした布に記す店のマーク。

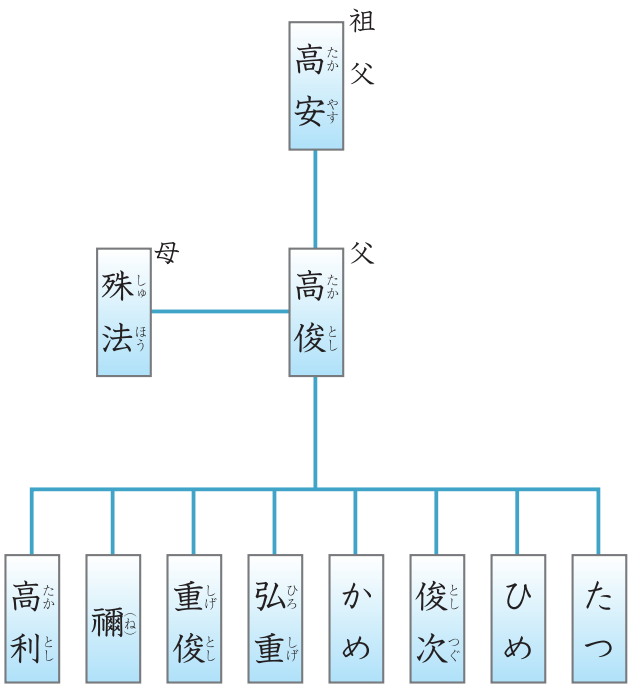
呉服
和服用の織物の総称。特に絹織物をさす。

切通し
山や丘などを切り開いた道。この場合、道の両側に三井越後屋の店が並んでいた様子をいう。

川柳
五・七・五の音を持つ日本語の詩。俳句と違い季語がなく、庶民のくらしがよく分かる。

2　若かりしころの高利

一六二二年、三井高利は、父高俊、母※殊法の末っ子として、松阪本町に生まれました。高利の祖父高安は、近江国の大名※六角氏の家臣でしたが、当時天下統一をめざす※織田信長に六角氏が滅ぼされたため、伊勢の地に逃れ、武士をやめたと言われています。その後、高安の子高俊は商人となり、松阪で※質屋や酒、味噌の商いを始めました。高俊と殊法の間には、四男四女が生まれ、その八番目に生まれたのが高利でした。殊法は、とても商いの才能があって、仕事熱心な人でした。高利は、そんな母から商いの方法を自然と学んでいきました。



三井家系図


高利の産湯として使った井戸
三井家発祥地（本町）

殊法
今の多気郡多気町丹生の永井家の娘。

六角氏
鎌倉時代から戦国時代にかけて近江国（滋賀県）南部を中心に勢力を持っていた武将。

織田信長
尾張国（愛知県）に生まれた戦国武将。

質屋
物を預かってお金を貸す店。

一六三五年、十四歳になった高利は、先に江戸や京都で店を出していた兄俊次の江戸の店に手伝いとして向かいました。その時、高利は金十両分の松阪木綿を持っていきました。それを元手に自分の商いもするためです。高利は、修業を重ね、そこで類まれな商いの才能を発揮していきました。そして、十八才で江戸の店の支配人となりました。しかし、一六四九年、二十八才の時に松阪で母の世話をしていた兄重俊が亡くなったため、松阪に帰ることになりました。

松阪にもどった高利は、この地でも商いをおこないました。また、豪商※中川家の娘かねと結婚し、たくさんの子どもたちが生まれました。その子どもたちも、かつての高利のように江戸の俊次の店で働き、商いの基礎を身につけていきました。

このころの伊勢平野では、※綿花の栽培や木綿織りが盛んで、松阪やその近辺の村



高利とかねの肖像画



江戸時代の算盤（三井文庫所蔵）

中川家
今の中町にあった両替商。江戸、京都、大阪に店を持っていた。

綿花
「棉花」とも書く。綿の種を包んでいる白い部分を糸にして布の材料にした。



綿の花



人でにぎわう日本橋付近
「東都名所 日本橋真景并ニ魚市全図」（国立国会図書館所蔵）

は、他の地域に比べて、経済的に豊かでした。こうした条件もあって、高利は※大名貸しや郷貸しで利益を上げ、自分の店を開くための資金を蓄えていきました。

3 念願の地 江戸へ

一六七三年、五十二歳になった高利は、兄俊次が亡くなると、念願であった江戸と京都に進出しました。高利は、子どもたちとともに、江戸随一の呉服街である本町一丁目に間口が九尺（約二・七メートル）の小さな店を借り、呉服を売る店を開きました。また、京都には、呉服を仕入れる店を開きました。店の名前は、松阪や江戸と

大名貸しや郷貸し
大名や村にお金を貸すこと。松阪周辺の村では、三井家からお金を借りて、新田を開発したところもあった。

同じ「越後屋」でした。高利はこの二つの店を子どもたちにまかせ、松阪で商いの指揮をとりました。

このころの江戸は、政治の中心として急速に発展していました。多くの幕府の武士や全国の大名の妻子や家臣が住んでいました。また、大名も定期的に※参勤交代で江戸に滞在しています。そんな人々の生活を支えるため、商人や職人が移り住み、たくさんの物資が江戸へ運ばれるようになりました。こうして、江戸は巨大都市へと発展していきました。このような状況の中で、高利は商いの成功を手中におさめていくのです。



「浮絵駿河町呉服屋図」（三重県総合博物館所蔵）

4 大繁盛の三井越後屋

高利と子どもたちは、さまざまな商いの方法を次々と取り入れていきました。その代表的な方法



三井越後屋江戸本店模型
（東京都江戸東京博物館所蔵）

参勤交代
江戸時代に大名が一定期間江戸に滞在させられた制度。

現銀（金）掛け値なし
商品に定価をつけて、代金を後払いにしないで現金払いで売ること。

が「※現銀（金）掛け値なし」と「※店前売り」です。越後屋では、これからの商いは武士だけではなく、江戸に増え続けている町人も相手にすべきだと考え、これまで主流だった大名や※富裕層への※掛け売りに加え、商人や職人も相手として、店頭での定価どおりの現金売りに力を入れました。

また、当時呉服の最大の生産地であった京都の仕入れ店では、商人から安い商品を大量に買い付け、後には生産者から直接買うことも始めました。こうすることで、江戸の人々は京都の※西陣織という上質な※反物からてごろな布まで、安い定価で安心して買うことができたのです。

さらに、六十五才となった高利は、京都にも※両替店を開いて、自分の商いの本拠を松阪から京都に移しました。そして、高利の子どもたちは、江戸幕府から一六八七年に※呉服の御用、一六九〇年に※為替の御用を命じられるなど、幕府の信頼を得るほどになりま



裏　表

駿河町越後屋大店の看板（株式会社三越伊勢丹所蔵）

店先売り
店頭で商品の販売をすること。

富裕層
財産があって豊かな人たち。

掛け売り
代金後払いで商品を販売すること。

西陣織
京都の西陣で生産される高級な織物の総称。

反物
着物になる前の布。


反物
（松阪木綿振興会提供）

両替店
貨幣の交換や預金、送金などをおこなう店。江戸では三年前に両替店を開いていた。

呉服の御用
将軍に呉服をおさめる役目のこと。

為替の御用
大阪から江戸などに送る幕府の公金を扱う役目のこと。

した。

一六九四年五月六日、高利は立派な商人になった子どもたちに看取(みと)られて、七十三才で亡くなりました。



駿河町の呉服店と両替店の絵（三井住友銀行所蔵）

江戸時代の終わりには、三井家は、江戸に五店、京都に七店、大阪に二店、松阪に一店を構えるほどの商(あきな)いをしていました。

高利の商いは、その後も子孫が引き継(つ)ぎ、日本経済に大きな影響(えいきょう)をあたえました。



高利使用の印かん（三井文庫所蔵）



高利木像
（真正極楽寺　真如堂(しんにょどう)所蔵）

二、高利と母殊法（しゅほう）の教え

高利の三男高治（たかはる）が書いた「※商売記」には、高利の母殊法の※逸話（いつわ）が書かれています。※ひしゃくや※道端（みちばた）の古縄（ふるなわ）、※すり鉢（ばち）の雨（あま）どい受けの話などです。ここでは、この中の一つを取り上げることにします。

高利が幼いころのことです。高利の家では、質屋を営み、味噌（みそ）や酒を売っていました。高利は、父高俊（たかとし）に代わり店を切り盛りしている母の姿を見て育ったのです。

ある日の朝、高利が店の前に※打ち水をしていると、使っていたひしゃくの底が壊（こわ）れてしまいました。高利は、もう使えないと思ってひしゃくを捨（す）てようとすると、それを見ていた母は、

「高利、どうしてひしゃくを捨てるんだい。」

と、高利に尋（たず）ねました。



「商売記」（三井文庫所蔵）

商売記
三井家の商売の歴史。高利の言葉、母の逸話などが書かれている。

逸話
人に知られていないエピソード。

ひしゃく
水をすくう時に使う、木製または竹製の道具。

道端の古縄
道端に落ちている古縄などを、知り合いに土壁（かべ）の材料として再利用するようにすすめる話。

すり鉢の雨どい受け
底の抜（ぬ）けたすり鉢を、水が飛ばないように雨どいの受け皿として使った話。


すり鉢

打ち水
道や庭先に水をまくこと。



母　殊法（しゅほう）
『知恵は富なり　歴史漫画
三井高利のすべて』より

「だってお母さん、ひしゃくの底が壊（こわ）れちゃ水がまけないよ。」

と、高利は答えました。

「確かに水はまけなくなったけどね、まだまだ使い道があるんだよ。」

「えっ。」

母の言葉の意味がどういうことなのか、高利は分かりませんでした。

「ふふっ。じゃあ新しいひしゃくで水をまき終えたら、居間まで来なさい。」

と、母は笑って答えました。

水をまき終えた高利は、母に言われたとおり居間へやってきました。

「お母さん、高利です。」

「おお。高利か、水まきご苦労だったね。中にお入り。」

母に招き入れられ、高利は居間に入りました。



打ち水などに使うひしゃく

「そこにお座り。」

母に言われるまま、高利は座りました。

「お母さん、さっきの底の壊れたひしゃくの使い道ってどういうことなんですか。」

ひしゃくの使い道が早く知りたい高利は、身を乗り出して聞きました。

「まあまあ、そんなにあわてないで。お茶でも飲んで落ち着きなさい。」

使い道を早く知りたかった高利ですが、高利は、しぶしぶお茶が出来るのを待ちました。

「さあ、お茶を入れましたよ。おあがりなさい。」

と、母がお茶を高利に差し出したときです。

「あっ。」

高利は、気づきました。そばの※茶壷の敷台に使われていたのは、先ほどの壊れた底の抜けたひしゃくだったのです。



茶　壷

「確かにひしゃくとしては使えなくなったけど、頭を使えば別の使い道があるんだよ。商人は発想が大事。高利、日ごろから柔軟な発想をすること、物事を工夫することを心がけることが大切ですよ。」

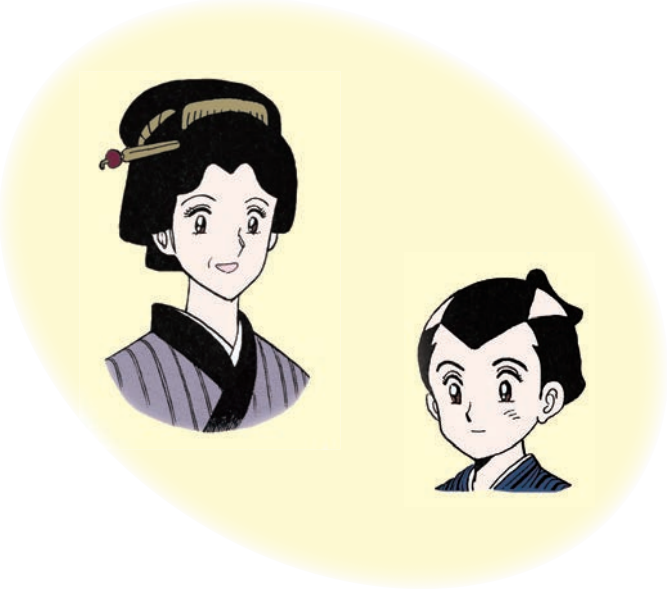
茶壷
茶の葉を保存しておくのに使用する壷。殊法は、壊れたひしゃくを壷の底に置き、転がらないようにした。

「はい。」

高利は、母の言葉をかみしめながらお茶を飲みました。その時のお茶は、今まで飲んだ中で一番おいしいと思ったことでしょう。

高利は、幼いころに母に教えてもらったことをいつも考え、新しい商売の方法を生み出しながら、それを行動に移していきました。

こうして、高利は日本中に知れわたる大商人となっていったのです。





殊法（しゅほう）の生家　永井家の旧跡地（きゅうせきち）
（多気町丹生（にゅう））

三、豪商のまち　松阪を歩く

1　ポケットパークの※ライオン像

あきとさんが、おじいさんといっしょに市役所の辺りを散歩していた時、本町の交差点の角にライオン像があるのに気がつきました。その側には、この像についての説明があり、そこには「三井家の※始祖・三井高利（一六二二年～一六九四年）は松阪に生まれ、全国にその名を知られる大商人になりました。」と書いてありました。そして、この場所はかつて三井家の屋敷の一部であることも分かりました。

あきとさんは、全国に名を知られた商人がいたことに驚くとともに、高利に大変興味を持ち、本町と隣の魚町を見て回ることにしました。



三井家発祥地（本町）



松阪商人の館（本町）



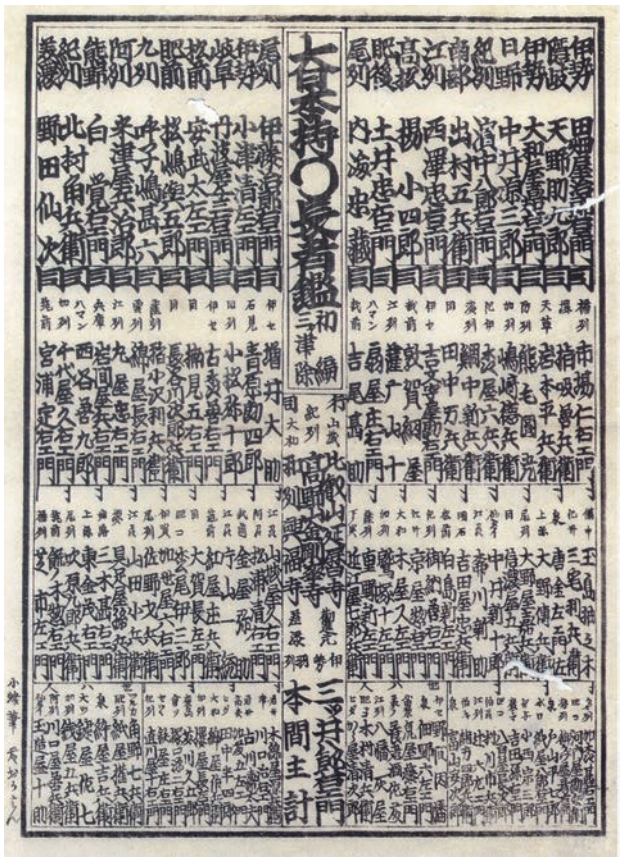
ライオン像（本町）

ライオン像
松阪市へ寄贈された三越のシンボル。三越の前身は三井高利の越後屋呉服店。三井家の「三」と越後屋の「越」から名付けられている。

始祖
ある物事を最初に始めた人。高利は「元祖」、「始祖」とも呼ばれていた。

2　江戸時代に活躍した松阪商人

歩いてみると、三井家の発祥地をはじめ、今でも※小津家、※長谷川家といった大きな商家が残っていて、江戸時代に商人の町として大変栄えた地域であることが分かってきました。あきとさんは、どうしていくつもの大きな商家があるのか不思議に思って、小津家の建物を公開している「松阪商人の館」に入ってみました。すると館内には、蔵やかまどが残っていて、お金を入れる※千両箱や※万両箱のようなものも展示されていました。あきとさんは、展示品の中に以前見たことがある大相撲の番付表にそっくりなものを見つけました。その番付表の真ん中に「大日本持〇長者鑑」と書いてあるので、お金持ちの番付のようなものだと分かりました。その下に大きな文字で「※勧進元　三ツ井八郎右エ門」



「大日本持〇長者鑑」

小津家
本町の豪商。江戸で紙店二店、木綿店一店を経営した。

長谷川家
魚町一丁目の豪商。江戸で木綿店五店を経営した。

千両箱
小判千枚を入れるための箱。

万両箱
千両箱が十個入るという蔵の地下に埋められた金庫。


万両箱

勧進元
イベントを開催する主催者。

と書かれていました。また、両側には商人の出身地を示す全国の地名と名前が書かれていました。館員の春多さんに、この番付は今から二百年ほど前に作られたもので、出身地である「伊勢」の下に書かれている「大和屋」は湊町の※長井家、「小津」は松阪商人の館の小津家、「長谷川」は魚町の長谷川家だということを教えてもらいました。これを聞いて、江戸時代には、三重県、中でも松阪の商人たちが全国的に活躍していたことが分かりました。



「新撰江戸名所 日本橋雪晴ノ図」
（国立国会図書館所蔵）

3 大商人を生んだ町 松阪

あきとさんは、なぜ大きな商売をしていた家が多かったのか気になったので、次の日、学校の先生に聞いてみました。先生によると、それにはいくつかの理由があるということでした。

第一に、松阪の町を開いた戦国時代の武将蒲生氏郷が町の発展を図るため、税金をはらわなくて

長井家
湊町の豪商。江戸で木綿店二店を経営した。



「蒲生氏郷画像」
（西光寺所蔵、福島県立博物館寄託）

もだれもが自由に商売ができるようにしたり、きまりを作って商人を保護したり、有力な商人を招いたりして商売の振興に力を注いだからです。そのため、※伊豆蔵や※角屋、三井、小津、長谷川、長井などの大商人と呼ばれる商家がたくさん出たそうです。

第二に、氏郷がそれまで海沿いを通っていた※伊勢街道を町の中心に付け替えたからです。それにより、たくさんの人が集まり、物の流通が活発になりました。また、江戸時代に※和歌山街道が整備され、ますます全国の情報や文化が入りやすくなったそうです。

第三に、松阪地域の農家では、早くから米以外に茶や綿花の栽培をしていて、木綿織りや染めの技術も発達していたため、木綿織物の商品化が進んでいたからだそうです。松阪の商人の多くは、木綿製品を農家から買い取り、それを江戸の店で販売したそうです。

伊豆蔵
本町の豪商。江戸で呉服店を経営した。

角屋
湊町の廻船問屋。船の荷物を扱ったり手配したりした。

伊勢街道
四日市の日永から伊勢神宮まで続く道。

和歌山街道
和歌山と松阪を結んだ道。

三井家では、高利が生まれたころは質屋を営みながら味噌や酒などを販売していましたが、高利と子どもたちは他の商家と同じように呉服や木綿などの販売を展開していきました。

4 「旧長谷川邸」を訪ねて

ますます興味をもったあきとさんは、休みの日に旧長谷川邸の見学に行きました。この家の広大な敷地には、いくつもの建物が並んでいますが、見た目は決して派手なものではありませんでした。邸内を案内されている家城さんの説明では、これは長谷川家の質素・倹約という※家訓からきているそうです。

邸内に入ると、タンスのように大きな金庫、五つもある黒壁の蔵や大きな池を中心とした庭園、神社などがあり、当時の繁栄ぶりが想像できました。蔵



旧長谷川邸（魚町）



旧長谷川家の大判・小判

家訓
家に伝わる決めごと。

の中には、千両箱や江戸時代のお金が展示されていました。あきとさんは、昔話にでてくる大判・小判を初めて見ました。

邸内には、長谷川家の店があった江戸の※大伝馬町一丁目の浮世絵が飾られていました。遠くに富士山と江戸城が見える大きな通りの両側には、長谷川家や長井家、小津家ののれんのかかったお店が描かれていました。また、そのとなりには同じ場所の現在の写真が展示してありました。なんとそこには、何百年もたった今でも小津家の会社があるということです。

松阪商人に関心を持ったあきとさんは、松阪商人の館で見た長者番付に名前のあった三井高利のことがもっと知りたくなり、高利の生涯を漫画にした『松阪商人　知恵は富なり　歴史漫画　三井高利のすべて』という本を読んでみることにしました。





木綿問屋が立ち並ぶ大伝馬町一丁目
「東都大伝馬街繁栄之図」

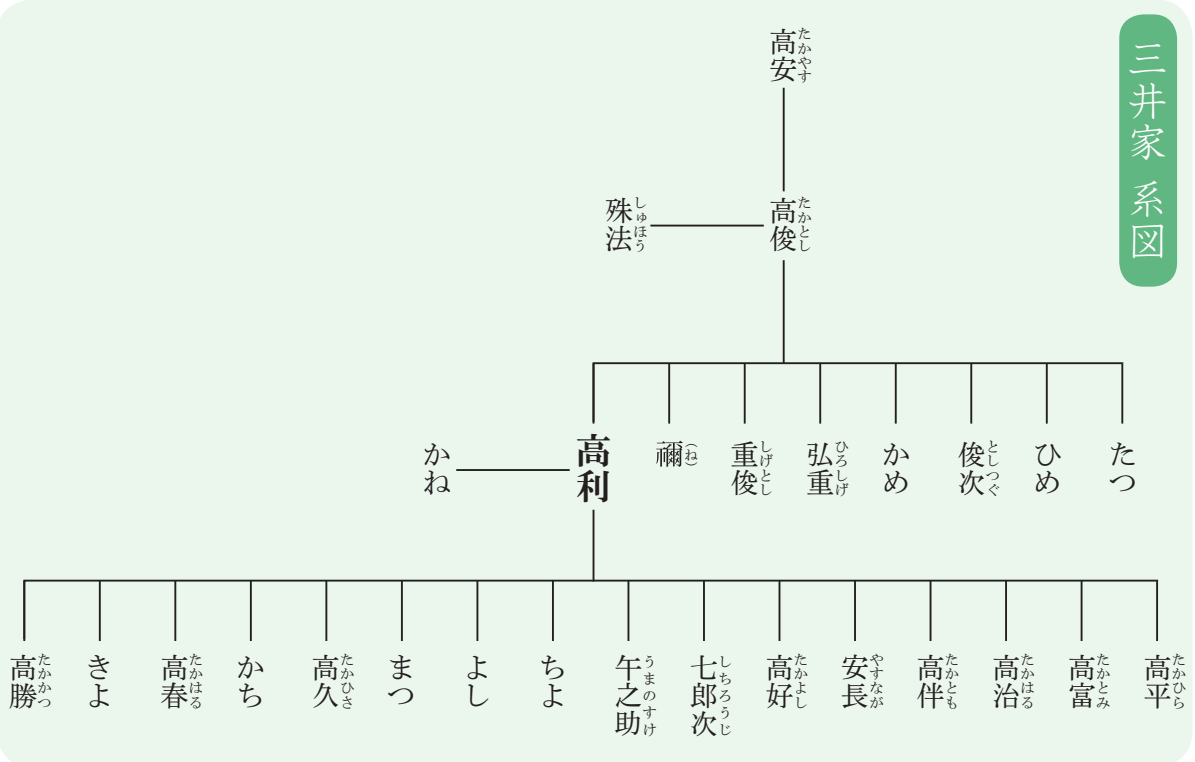
大伝馬町一丁目
今の東京都中央区日本橋本町。伊勢国出身の商人の店が多かった。

高利さん年表

西暦	年齢	おもなできごと
一六二二年	1	三井越後屋の四男として松阪本町に生まれる
一六三五年	14	長兄俊次の江戸本町四丁目店を手伝う
一六三九年	18	次兄重俊、母の世話のため松阪へ帰郷する 重俊に代わり江戸店を取りしきり、商才を発揮する
一六四九年	28	次兄重俊死去に伴い、母の世話のため帰郷する 両替商中川清右衛門の娘かね（十五歳）と結婚する この後、松阪で金融業などをおこなう
一六五三年	32	長男高平生まれる
一六七三年	52	長兄俊次、京都にて亡くなる 江戸本町へ呉服販売店、京都へ呉服仕入れ店を開業する
一六七六年	55	母殊法亡くなる
一六八三年	62	呉服店を駿河町南側に移し、「現金掛け値なし」の商法で売り上げを増やす 呉服店の西側へ両替店を開設する
一六八六年	65	京都へ両替店を開設し、裏を居宅とする
一六八七年	66	長男高平、幕府の呉服御用となる
一六九一年	70	大阪高麗橋に呉服店、両替店を開設する
一六九四年	73	五月六日、京都にて亡くなる

松阪　江戸　京都

三井家 系図





高利さん なんでも質問箱

Q 高利さんのお母さんはどんな人でしたか。

A 丹生の永井家に生まれました。多気郡多気町丹生は、昔、奈良の東大寺の大仏に、丹生水銀が使われるなど、水銀で栄えた町です。全国から商人や鉱夫が集まり、※「丹生千軒」と呼ばれるほどの繁栄をみせました。その後「丹生のお大師さん」の※門前町として栄えました。母殊法さんは、丹生の豪商永井家の娘で、十三才の時父高俊と結婚しました。彼女は、夫が商売に関心がなかったので商売を取り仕切りました。

商売では、質物の利息を他の店より安くして、そのかわり質物の量を多く取ったり、酒や味噌を買いに来る人にお茶やたばこを出したり、時には食べ物を出したりして得意先を増やしました。※慈悲深い人で、毎朝四時に起きて、神仏にお祈りをしていました。また、ものをムダにしない心がけは徹底していました。

一六七六年、八十七才の生涯を終えました。「三井家商いの元祖」ともいわれています。

Q 高利さんの結婚相手のことを教えてください。

A 高利さんの結婚した人は、かね（寿讃）さんと言います。松阪の豪商中川家の娘でした。しかし、生活は質素で人を思いやり、情け深い人で、とても慕われ、夫とともに「元祖」と言われました。働いている奉公人が早朝に出発するときは、早起きして見送り、奉公人の親戚が訪れた時はていねいに面会したという人でした（主従の別がはっきりしていた時代では、面会するだけでも立派なことでした）。健康で、男十人女五人の子どもを産みました。

Q 高利さんが、商売を成功させたのはどうしてですか？

A 高利さんは、一生懸命働いて、我慢強く準備をする人でした。こうと決めたら人に反対されても聞かずにやり抜く強い意志がありました。家族や奉公人の性格や考え方をよく見極め、適材適所で人を動かすこともできる人でした。

高利さんが世に出る前、呉服販売は、武士などの裕福な客を相手にし、その屋敷まで商品を持って、そのつど値段を交渉し、支払いはお盆前か年末に支払うという方法（屋敷売り・掛け売り）をとっていました。しかし、高利さんたちは、値引きを前提にした値段を高めにつける方法（掛け値）を改めて、変わらない値段（定価販売）をつけて呉服に詳しくない客でも納得して買えるようにしました。さらに、現金で払ってもらうこと（現金販売）で馴染みのない客でも買い物ができるようにしました。

また、多くの商人が毎年きまった数の仕入れをするのが慣例でした。高利さんたちは、仕入れ値段が安ければ、大量に仕入れさせ、その価格にふさわしい販売の価格を細かく調整し、※薄利多売をしました。

高利さんの教えを受け継いだ子孫は、さらに宣伝チラシ「引き札」を印刷して配ったり、雨の日には、店の名前を書いた貸し傘のサービスをしたり、新しい方法を取り入れていきました。

Q 高利さんの店では、どれくらいの売り上げがあったのでしょうか。

A 資料によると駿河町移転後で月一三〇〇両ほどです。江戸時代の一番多いときは、高利さんの孫の世代で一日七〇〇両だったといい

ます。江戸時代、三井家は日本有数のお金持ちでした。

Q 松阪の三井さんの家は、どこにありましたか。

A 左の地図にあるように、松阪本町にありました。

三井さんの家は、時代によって代わりますが、明治十年代から昭和前期まで下の写真のような建物がありました。塀に囲まれた中に屋敷と蔵と庭がありました。



※丹生千軒＝たくさんの家が建ち並び、人々で賑わっている様子をいう。
※門前町＝神社や寺の参道沿いに発達した町。
※慈悲＝思いやり、情けのこと。
※薄利多売＝品物一つあたりの利益を少なくし、たくさん売ることで、全体の利益を多くすること。



松阪三井家の屋敷（三井文庫所蔵）



松阪三井家の門（三井文庫所蔵）

訪ねてみよう

三井家ゆかりの地

◎三井家発祥地

本町

この大きな門の中には、高利の祖父高安と父高俊の石塔、高利が生まれた時に※産湯の水をくんだといわれる井戸、「家祖誕生之地」と刻まれた石碑などがあり、市の文化財に指定されています。



◎来迎寺

白粉町

三井家とゆかりの深い天台真盛宗のお寺。今の本堂（国重要文化財）や表門や裏門（市指定文化財）などを建てた時には、三井家からたくさんの寄付金を受け、本堂の中にある仏具なども寄進されました。



◎三囲神社

本町　御厨神社内

三井家の各店は、江戸時代から商売繁盛で知られる江戸向島（今は東京都墨田区向島）の三囲稲荷を信仰しました。この社は、塩屋町（今は湊町）にあった三井・松阪南家の別宅内にありましたが、火事で焼けたために場所が転々と移り、一九三一年ころに現在地にまつられました。



◎菅相寺

愛宕町

「天神さん」で知られる臨済宗のお寺。本堂前には「三井氏」と刻まれた一七三三年寄進の大きな石灯籠があり、本堂の左側には一八五二年に三井家の使用人たちが寄進した鉄で造られた大きな「神牛」が置かれています。



◎旧五曲妙見堂

内五曲町

もとは「妙見さん」で知られた日蓮宗のお寺。一八五〇年、三井・松阪南家が「経王寺」として建てましたが、一時期※廃寺になりました。現在は、正式には「妙法教会」と名を変えましたが、今も松阪南家ゆかりの品が残されています。



◎柳福寺

久米町

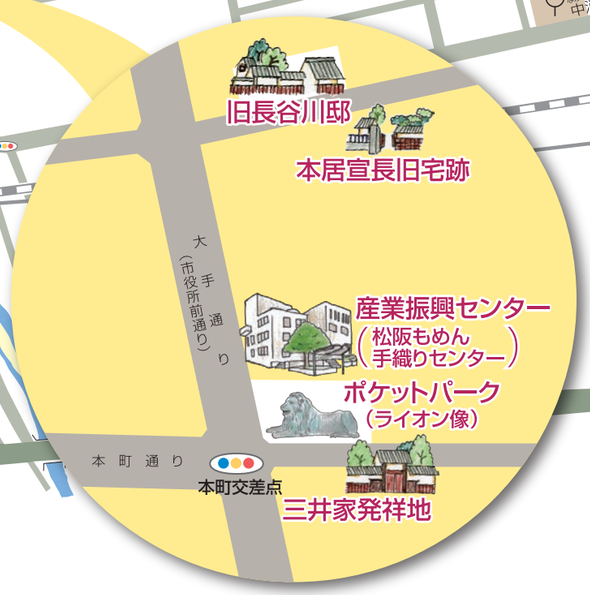
旧伊勢街道沿いにある浄土宗のお寺。三井家の松阪南家と※新町家が支援して建てられました。松阪南家が寄進した仏像や、新町家がペットとして飼っていたホオジロの供養碑などが残されています。



※産湯＝生まれた子のはじめての入浴。
※廃寺＝寺と認めず、止めさせること。
※新町家＝東京に住む三井本家の一つ。

歴史あるまち 松阪

駅部田町
善覚寺
大黒田町
福源寺
大黒田町
県道松阪環状線（近鉄道路）
黒田町
第五小学校
松阪高等学校
松阪南消防署
春日町
新松阪公園
黒田町通り
道標
幸小学校
茶与町
工業高校グランド
旧五曲妙見堂
五曲橋
農業屋コミュニティセンター
クラギ文化ホール
交番
子ども支援研究センター
橋西地区市民センター
文化財センター
松阪図書館
『はにわ館』
鈴の森
内五曲町
阪内川親水公園
アクセス道路
松阪中央総合病院
川井町
松江小学校
本居宣長ノ宮
宣長歌碑
松阪工業高校
松阪神社
殿町中学校
和歌山街道
南町
国道42号
白粉町
常教寺
新町
本居宣長記念館
松坂城跡
松阪公園グランド
殿町
鈴屋
御城番屋敷
歴史民俗資料館
梶井基次郎文学碑
新松阪大橋
西之庄町
松阪郵便局
五十鈴町
来迎寺
真台寺
本居宣長春庭墓
殿町（旧・同心町）
原田邸
新座町
開連橋
長月町
樹敬寺
宣長歌碑
松阪市民病院
大手通り
（代官小路）
第一公民館
松阪市役所
垣鼻町
第二小学校
宣長碑
菅相寺
小津安二郎青春館
湊町
平生町
新上屋跡
旧長谷川邸
川井町
第三小学校
花山寺
船江町
三角公園
愛宕町西交差点
愛宕町
愛宕山竜泉寺
願証寺
宣長碑
日野町
駅前局
駅前通り
（油屋町）
魚町通り
魚町
松阪もめん手織りセンター
産業振興センター
本居宣長旧宅跡
魚町橋
大橋
西町
松阪中消防署
八雲神社
善福寺
ベルタウン
本覚寺
職人町通り
伊勢街道
中町
本町
（紺屋町）
（工屋町）
三井家発祥地
松阪商人の館
正円寺
田原町
京町
清光寺
養泉寺
龍華寺
法久寺
岡寺山継松寺
（博労町）
御厨橋
挽木町
観光情報センター
JR松阪駅
御厨神社（三囲神社）
近鉄松阪駅
宣長歌碑
清生町
京町一区
末広町
鎌田町
済生会松阪総合病院
朝日町一区
東口公園
国道42号
裁判所
松阪警察署
宮町
中央町



遊んでみよう！（裏面）

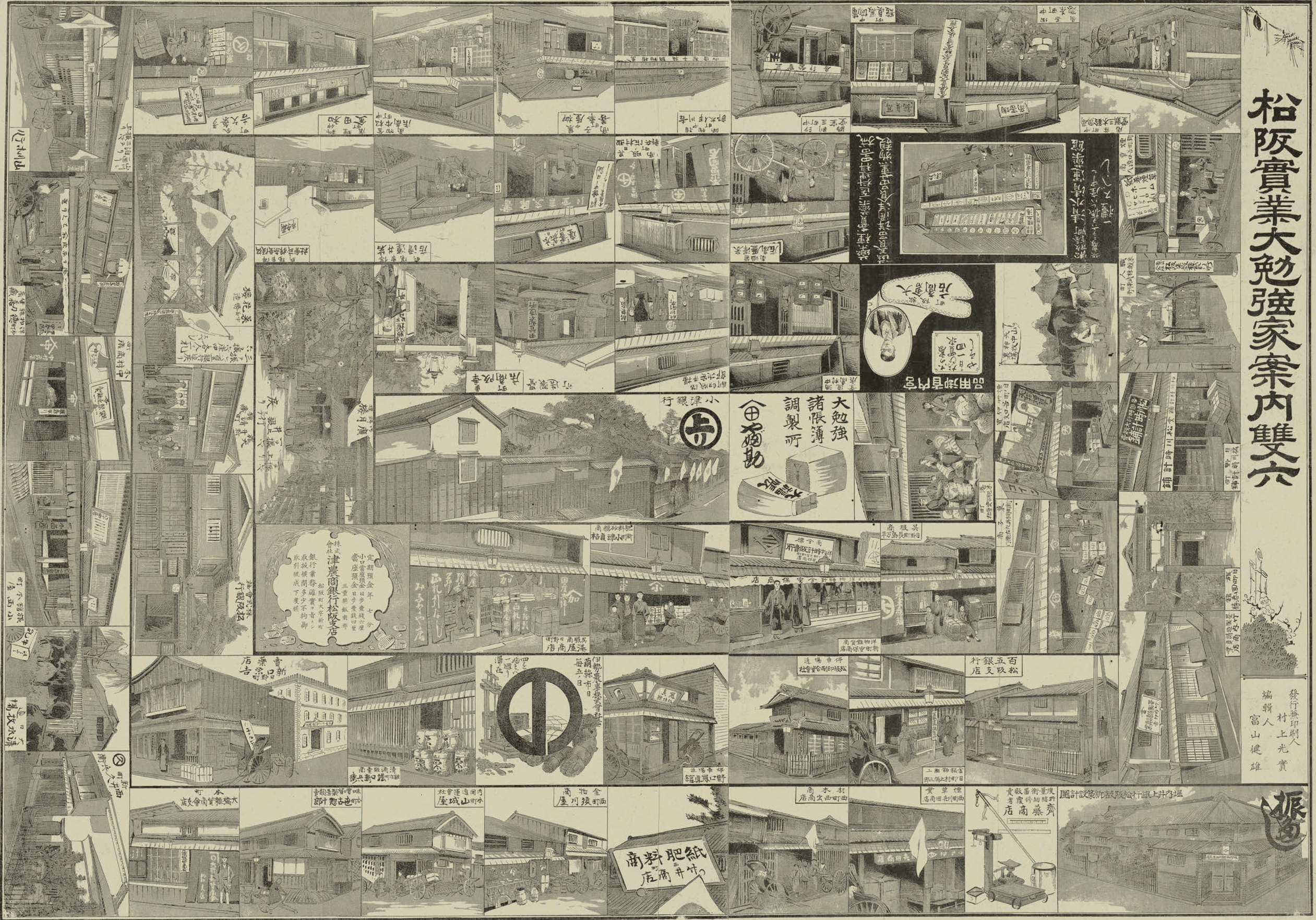
『松阪実業大勉強家案内双六』

一九〇二年に刊行された松阪中心商店街を描いた双六。右下の「堀内井上銀行」が振り出しで右回りに進み、中央の「小津銀行」が上がりです。

小津銀行（松阪商人の館）や、振り出しから五コマ目の「西町　須川屋」の建物は、今も残っています。

松阪實業大勉強家案内雙六

發行兼印刷人　村上光實
編輯人　富山健雄



編集後記

郷土の偉人に学ぶシリーズの第四冊目として「三井高利」を作成しました。平成二十九年三月改訂の「松阪市教育ビジョン（松阪市教育振興基本計画）」の基本理念「夢を育み　未来を切り拓く　松阪の人づくり」を踏まえ、基本方針の３「松阪市は、宝塚古墳など貴重な歴史遺産があり、また、蒲生氏郷、三井高利、本居宣長、松浦武四郎など、多くの偉人たちが活躍しました。これらの伝統ある歴史と文化を築いてきたふるさと・松阪に誇りを持ち、愛し、優れた先人たちに学び、自らの夢を抱く子どもを育てます。」の実現を図るための冊子です。

松阪市の全ての子どもたちは、四年生で「本居宣長」、五年生で「松浦武四郎」、六年生で「蒲生氏郷」を学びます。この「三井高利」の冊子は、社会科で歴史を学習する小学校六年生が冊子「蒲生氏郷」と合わせて学習の場で選択して、活用することができます。

郷土の偉人に学ぶ教育を推進することによって、郷土を愛する心の醸成を図ることは、

①子どもたちの豊かな心を育む
②地域社会の発展に貢献する意欲を喚起
③異なる文化や歴史を理解する態度の育成
④地域のことを語ることのできる人材の育成
⑤伝統文化の継承

といったことが期待されます。社会科、道徳、総合的な学習の時間等における学びを想定しています。

二〇二二年は、三井高利生誕四〇〇年の節目を迎えます。この冊子が、改めて高利の足跡に思いを馳せるきっかけになれば幸いです。

一章「元祖 三井高利」では、「現金掛け値なし」の革新的な商法で大成功を収め三井の事業基盤を築いた高利をとりあげています。三井の歴史が三井高利に始まることを当時の資料を示しながら、概観しています。

二章の「高利と母殊法の教え」では、「商売記」を参照し編集委員が物語を創作しました。「三井家商いの元祖」といわれる母から、新しい商売の方法を生み出し、行動に移した高利を考える教材になっています。

三章の「豪商のまち　松阪を歩く」では、三井家だけでなく多くの松阪商人が全国的に商売で活躍するきっかけになった背景を紹介しています。

「三井家ゆかりの地」や綴じ込みの地図には、三井家や昔が偲ばれる町名や小路名、史跡等を載せました。三井家関連の「ライオン」「うし」「きつね」の絵も入れてあります。また、「松阪実業大勉強家案内双六」は、遊び方や当時の松阪の商家が想像できる図を載せています。これらを通じて、高利への理解がより深まるよう願っています。

協力してくださった方（敬称略、五十音順）

家城和秀、株式会社三越伊勢丹ホールディングス、蒲生氏郷公顕彰会、菅相寺（松阪市愛宕町）、国立国会図書館、西光寺（福島県）、坂梨律子、西方寺（松阪市清水町）、真正極楽寺真如堂（京都市）、たつみ堂（松阪市本町）、東京都江戸東京博物館、春多　常、藤田直信、福島県立博物館、松阪木綿振興会、三重県総合博物館、御厨神社（松阪市本町）、三井住友銀行、三井高利歴史まんが実行委員会、妙法教会（松阪市内五曲町）、本居宣長記念館、来迎寺（松阪市白粉町）、柳福寺（松阪市久米町）

郷土の偉人に学ぶ教育推進委員会（編集委員）

門　暉代司（松阪市文化財保護審議会委員）
松本　吉弘（前松阪市立第一小学校長）
村　　和明（公益財団法人三井文庫主任研究員）
近藤慎一郎（松阪市立第五小学校教諭）
三宅　孝史（松阪市立徳和小学校教諭）
木村　弘孝（松阪市子ども支援研究センター長期研究員）
安達　五百（松阪市教育委員会指導主事）

※表紙は、西方寺の、「東都 三井店之図」を使用しています。
※この冊子の写真で所蔵を示してないものは、松阪市と編集委員の所蔵です。



三井高利 郷土の偉人を知る④

平成30(2018)年3月14日
発行　松阪市教育委員会
編集　郷土の偉人に学ぶ教育推進委員会
印刷　光出版印刷株式会社